

出土した縄文時代の遺物 残存状態が非常に良いため、当時の生活を考える上で貴重です。

土器・土製品

最も多く出土しました。土器には深鉢・台付浅鉢・壺などの種類があり、これらの中には「渦巻き」「羊歯」「雲形」「工字」状の文様や、黒や赤の漆を塗ったものもみられます。土製品には土偶や耳飾りなどがあります。土偶は女性をかたどったカミを表現したもので、安産の祈願や、自然の豊かな恵みを祈るなどの宗教的・信仰的な行為に用いられたとも考えられています。



壺と浅鉢



乳房が表現されています

土偶の体部

石器・石製品

石鏃（矢の先端）・石匙（ナイフ）・磨製石斧（斧の刃）、石棒・石刀・独鈷石（祭祀・呪術の道具）などがあります。



せきぞく 石鏃



いしさじ 石匙

木製品・骨角器など

動植物

低湿地で地下水位が高いため、シカ・サケなどの骨や歯、貝殻、木の枝や種実などが水漬けとなっていました。動植物は食料だけでなく、骨角器や木製品へと利用されることもありました。



(編み物の籠に漆を塗って固めた容器)

らんたいしつき 籃胎漆器



ぞく 鏃

ゆはず形

サメの歯



イヌの頭



クルミ

大崎市

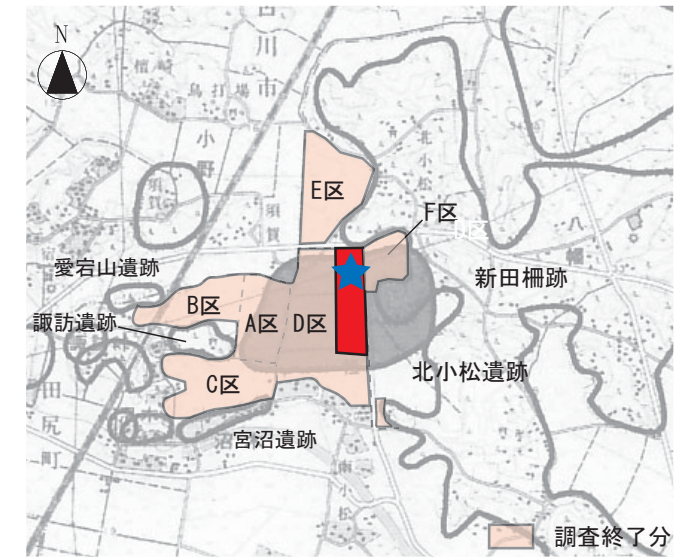
北小松遺跡

平成21年度発掘調査現地説明会

平成21年9月5日(土) 午前10:30~

【調査要項】

- 遺跡名 北小松遺跡
- 所在地 大崎市田尻北小松ほか
- 調査主体 宮城県教育委員会
- 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課
- 調査理由 経営体育成基盤整備事業田尻西部地区
- 調査期間 平成21年5月11日~11月末日(予定)
- 調査面積 約830㎡(8/31現在)
- 調査協力 大崎市教育委員会
宮城県北部地方振興事務所
江合川沿岸土地改良区



第1図 遺跡と調査区の位置

1. はじめに

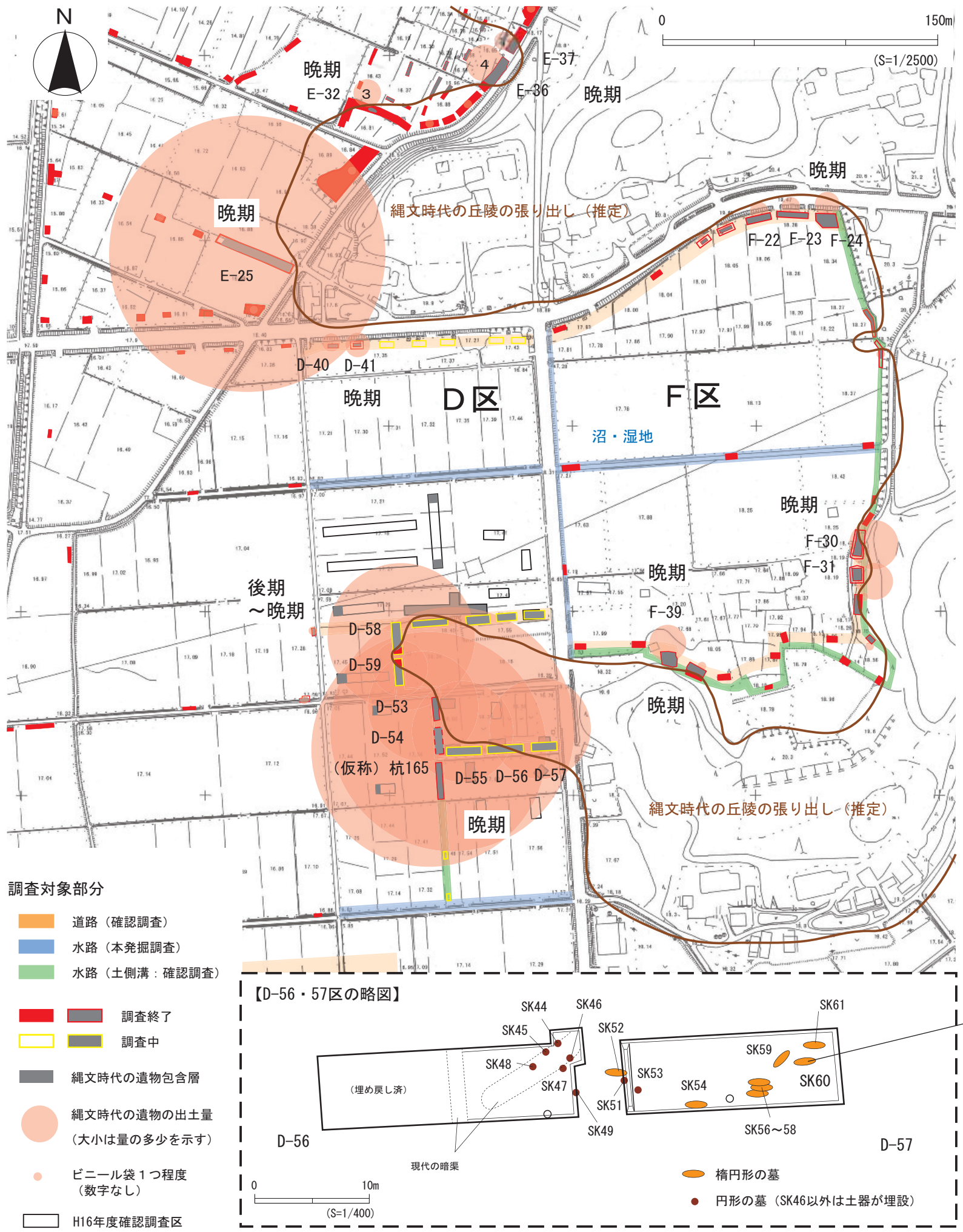
現在、田尻西部地区では、水田の規模を大きくして水路や農道を整備する「ほ場整備事業」が進められていますが、この区域には、新田柵跡(古代)や北小松遺跡(縄文時代)などの遺跡が分布しています。そのため、工事の前に新しく造る「水路」や「農道」部分(工事によって遺跡へ影響が及ぶ地点)を対象に、平成19年度から宮城県教育委員会による本発掘調査が行われています。今年度はその3年目にあたり、北小松遺跡の中でも特に遺物が多い中心部が調査対象地となっています。

2. 遺跡の立地と周辺の遺跡(第1図)

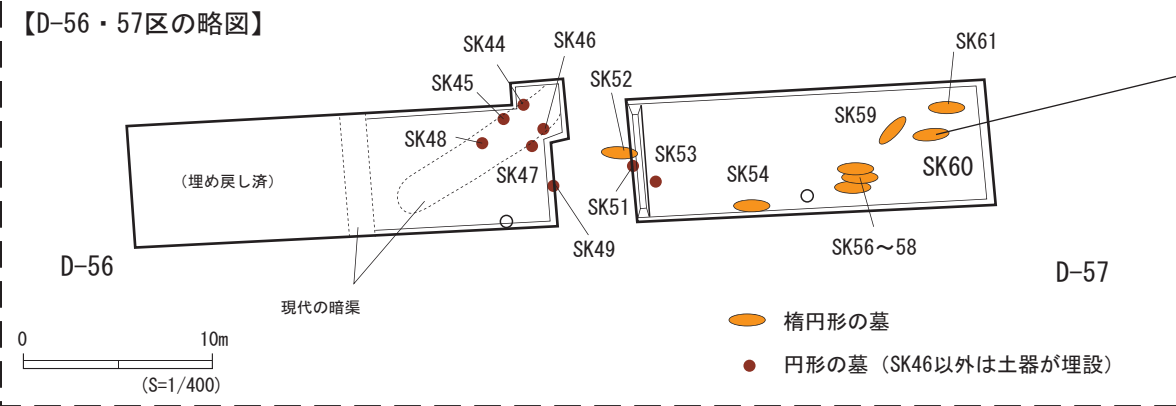
北小松遺跡は、大崎平野北辺の清滝丘陵から枝分かれした低い丘陵の縁辺と、それらに囲まれた沖積低地にあります。

遺跡の東方の丘陵部には、奈良・平安時代の城柵・官衙(役所)で有名な新田柵跡があります。また南東の丘陵部には愛宕山遺跡・諏訪遺跡(縄文・古代)、南の丘陵部には宮沼遺跡(縄文・古代)などの遺跡があります。

本遺跡は1957年の開田工事の際に、縄文時代の「人骨」や当時の人々が食料にしたシジミやタニシなどの貝類、多数の縄文土器類が発見されて、縄文時代晩期の遺跡として注目されるようになりました。そして近年の調査の結果から、現在の水田部分は沖積低地であり、縄文時代には沼地が広がっていたこと、その沼地の沿岸部である現在の低丘陵上や微高地上には早期・前期・中期・後期・晩期の集落があったこと、特に晩期には近接して多くの集落が営まれたことなどが明らかとなっています。



- 調査対象部分**
- 道路（確認調査）
 - 水路（本発掘調査）
 - 水路（土側溝：確認調査）
 - 調査終了
 - 調査中
 - 縄文時代の遺物包含層
 - 縄文時代の遺物の出土量
(大小は量の多少を示す)
 - ビニール袋1つ程度
(数字なし)
 - H16年度確認調査区



第2図 調査区の配置・遺物の分布と出土量

3. 調査の成果

今回の調査では縄文時代晩期（約2,500年前）の掘立柱建物（D-55区）、墓（D-56・57区）、集石遺構（D-55・58区）、埋設土器（D-58・59区）などのほか、過去の調査と同様に、丘陵の周縁部で晩期の遺物包含層が多く見られた地点で発見されました。遺物は平箱に換算して130箱分ありますが、ほとんどは遺物包含層から出土したものです。

そして、第2図の遺物の分布と出土量をみると、縄文時代の丘陵先端付近の調査区から特に遺物が多く出土する傾向がみられます。こうした状況から、遺物が多く出土した調査区近くの、現在の丘陵や高まりには、人々の暮らしていた集落が広がっていたと考えられます。

さて、特に注目されるのが、縄文時代の丘陵先端の南斜面に墓が集中していた地点（D-56・57区）です。この墓の平面形をみると、縦110～150cm、横60～80cmの隅丸長方形のものと、径30～70cmの円形のものとに大別できます。そして、隅丸長方形のものは頭を西向きに埋葬されたものが多く、円形のものには土器が逆さに伏せるように埋められているものが多いという傾向がみられます。これらの違いが何を反映したものなのかは、納められた骨の残存状態や、性別・年齢・血縁などの分析ともあわせて、今後、総合的に検討する予定です。なお、これらの墓は遺物包含層の上の面を掘り込んで作られていますが、下層の面を調査すれば、さらにみつかる可能性もあります。

今回、縄文時代晩期の集落と墓域を発見しましたが、後期（約3,500年前）の遺物が出土した地点（D-58区）のほか、過去の調査では、早期～後期の遺物が確認された地点もあり、人々は、早期から晩期の長期にわたって、「沼」の沿岸部を少しずつ移動しながら暮らしていたようです。ただし、生活した詳しい時期や場所、さらにどのように移動したのかは、さらなる調査と分析が必要のようです。

遺物包含層 土器・石器・木器・骨角器などの遺物を含む土層で、黒っぽい色が特徴です。



遺構 墓 胸に両手をのせ、膝を曲げて仰向けに葬られていました。

集石遺構 石棒や独鈷石などの石器や石材がまとめられていました。

